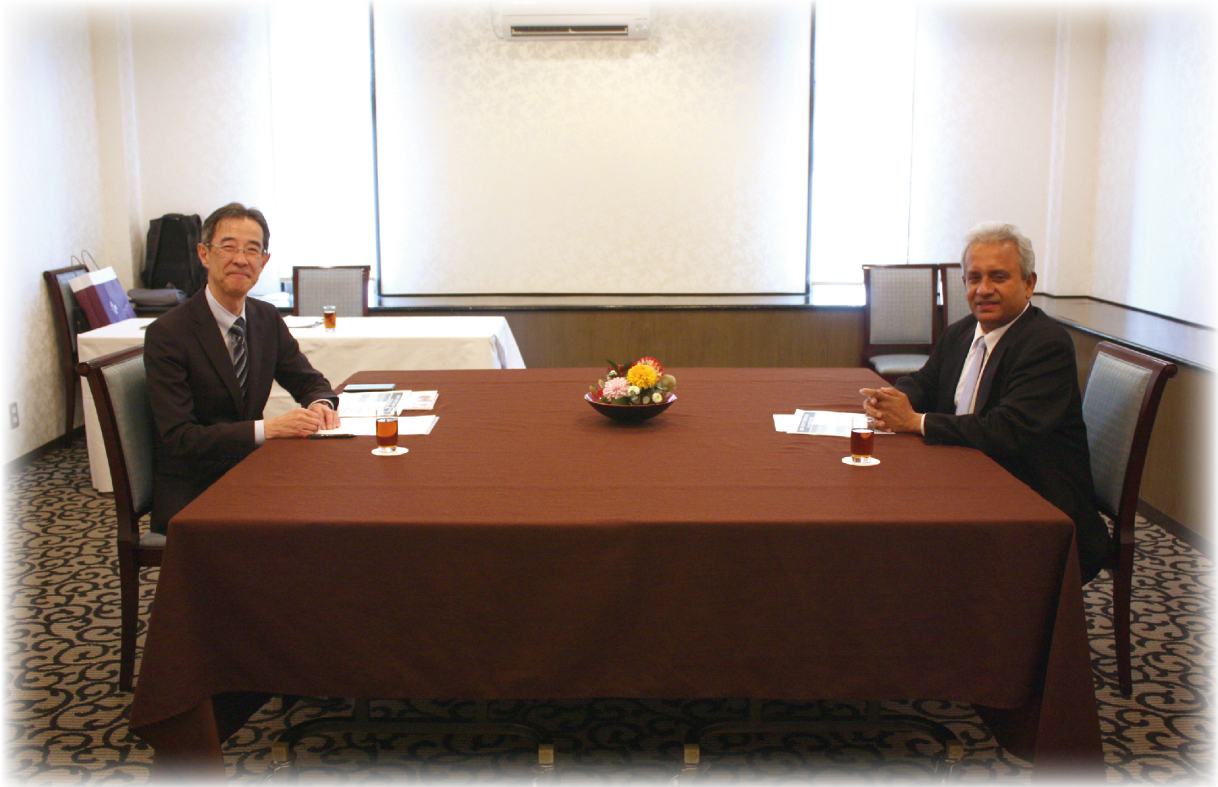


地域を豊かにする教育を目指して ～グローバルリーダーの養成を目指す聖霊女子短期大学～



(話し手) 学校法人聖霊学園 聖霊女子短期大学 学 長 マッテュ・フィリップ 氏
(聞き手) 一般財団法人秋田経済研究所 専務理事所長 佐藤 雅彦

佐藤 本日は大変ご多忙のところ、新春インタビューをお引き受けいただきまして、誠にありがとうございます。聖霊女子短期大学（以下、「聖霊短大」）は、2027年度から男女共学とし、名称を聖霊短期大学へ改称、2028年度からは専攻科の一部コースを学部に移行して4年制大学を新設されるなど、さまざまな教育改革により、優秀な人材を輩出することに取り組まれております。聖霊短大の取組内容や目指す姿などについて伺いしたいと思います。本日はどうかよろしくお願いいたします。

1 日本、そして秋田に来られたきっかけ

佐藤 最初に、フィリップ学長の経歴、聖霊短大に来られた経緯等をお聞かせください。

フィリップ学長（以下、敬称略） 私の出身大学であるインドのマイソール大学では、2年間、海外留学をすることが義務付けられていました。留学先に日本を選んだのは、私の専門が経済学で、日本経済を研究していたからです。日本に来たら、まずは日本語を勉強して、漢字が好きだったので漢字が読めるようになりたいという思いもありました。インドにはローマ字や他の

文字がありますが、字を見て意味が分かる漢字にすごく興味があり、他にもいろいろな日本文化に興味がありました。

日本では、名古屋の南山大学で勉強していました。2年間で日本文化の研修は終わりましたが、30年前にはまだ新しい学問だった宗教哲学が学べるということで、大学院に入りました。

私が日本に来た頃は、ちょうど冷戦が終わって、世界の交流が非常に盛んになり、社会が大きく変わって、たくさんの可能性がある時代でした。私が日本に来ていろいろな仕事をしたり、教育現場に行ったりして気付いたことは、特に若い人にはチャンスがあるということです。冷戦のときは、国際交流は限られた人しかできませんでしたが、今は誰でも外国に行って、学べる時代です。私も次に非常勤で教養科目を名古屋大学で教えながら教育研究を始めました。研究をしながら非常勤講師として学校で教えたり、外国人労働者の支援や国際交流イベントなどの地域活動をしたりしていました。長崎県の高校や純心大学でも2年ぐらい教えていました。

その後、国際開発が大変盛んになり、名古屋に戻ってきて名古屋大学で国際開発と国際法を勉強しました。そこから同志社大学でグローバルスタディーズ（グローバル教養）の博士号を取得しました。

グローバルスタディーズとは、グローバル社会の政治や経済の問題を全部学問立てて勉強するものです。私は経済学と政治学と哲学と国際開発と宗教学を学んでいたのので、それらをグローバルに横断する勉強をしたいと思い、そこで博士号を取得しました。

私が働いていた名古屋の幼稚園には、トヨタの社員の子どもが多く通っていました。幼稚園では、海外で生まれた子は少し日本語の語学力が劣るので、そのサポートをしたり、日本から

海外へ留学する前のオリエンテーションをしたり、英語を教えたりしていました。幼稚園で働きながら、リーダーシップという概念を「グローバル」「地域」「自己」の3種類に分けて学ぶ方法を3年かけて研究し、グローバル幼児教育のカリキュラムを開発しました。

それが終わると、次の目的は高等教育になりました。どこで研究するかは決めていませんでしたが、名古屋にいたときの友人が秋田にいたので、遊びに行きました。実は聖霊学園は名古屋にある聖霊病院とつながりがあり、聖霊短大の前学長がそこで仕事をしていました。35年前の名古屋は今の秋田と同じように私のような留学生が少なく、外国人はほとんどいませんでしたが、病院に行くと英語で親しくお話をさせていただきました。秋田に来てお会いしたところ、

「今は何をしていますのですか」とたずねられたので、「今は研究をしていて、次は高等教育の研究をしたくて場所を探している。大きい大学では研究に使うためのデータを取るのにすごく時間がかかるので、小さい大学を探していて、インドかドバイに行こうかと考えている」と答えたところ、「聖霊短大でやりませんか」と言われました。私は聖霊短大のことはあまり知りませんが、見に行くと全ての学生が同じ玄関から出入りしていました。それを見て、直感で「ここで研究しよう」と決めました。大学には大抵たくさん玄関があって、学生がどこから入ってくるか分からないので、学生の成長が見られません。学生が成長したかどうかを確認するためには、やはり観察しなくてははいけません。同じ玄関から出入りしていれば観察しやすいということで、すぐに聖霊短大で研究を開始しました。

現在、国は、少子化により短大教育を廃止する準備を進めています。恐らく2035年には日

本の短大は全部なくなっていると思います。聖霊学園としては、女子教育の時代は終わったから閉鎖してもいいと考えていましたが、前学長にはどうしても秋田に貢献したいという強い思いがありました。そこで、留学生も学べて秋田の人も学べる新しい教育を考えましょうということになりました。

世界のパラダイムシフトにより、デジタル化とグローバル社会が誕生したことで、グローバルと地域とデジタルが融合するといった内容を考えていました。秋田はとても可能性があるかと学生に話していますが、どのように教育すれば秋田の学生たちがこれをチャンスにすることができるか。そのためには語学力が必要ですし、秋田で開発したものを売ろうとすると、相手の文化を理解していなくてははいけません。また、やはり人口が減少していますから、AIを活用できるデジタル能力も必要です。さらに、社会を変えていくには、イノベーション力も大事です。さまざまな力が必要とされるので、ビジネスだけ、語学だけでは通用しない時代になりました。

日本では、文部科学省が「生きる力」「人間中心の社会」「持続可能な社会」という三つのテーマを打ち出しています。それらを全部組み合わせ、地域でもっと人材を育てるためには、まずは自ら商品を開発するイノベーション力と、それを売るビジネス力が必要です。そして、それらを実行するにはリーダーシップが必要ですし、何よりもプログラムを作る技術が必要となります。もちろん情報技術ではAIやプログラミングなどを学びます。学生も自分でホームページを作れるように、カメラを持ち、ドローンを使うという授業を行っています。自分で小さい会社を興せるようにするカリキュラムを女性リーダーコースに取り入れて、それにはどれぐらい

の教育と時間が必要か、2年かけて検証しました。

検証してみたら短大在学期間の2年間では足りないということが分かりました。リーダーシップを発揮するには、自己コーチングスペースやグローバル体験型授業が必要です。それがないとこういった人材を育てるのは難しいので、1年目はラボ体験といって、ラウンジにロボットを置いてロボットと遊んだり、プログラミングをしたりして、その後に文化体験をする。それには2年間では足りないので、4年制大学にしたいと考えました。

今考えている教育は、ビジネスとイノベーションとリーダーシップと技術です。そうすると、やはり男女共学化しなくてははいけません。今、聖霊短大には700人ぐらい勉強できる施設がありますので、4年制大学に移行しても新しく校舎を建てる必要はありません。新しく開発したビルス（B I L T H : Business Innovation Leadership Technology Human Science）教育の特徴は少人数で行うことです。ラボ体験は5人ぐらいでチームを組んで、先生も5人に1人付くという規模です。100人を超えると学習内容の質が落ちてしまい、研究室も足りません。そういった空間も考えて定員は何人までが適当かということを模索した結果、100人ということになりました。



(フィリップ学長)

2 聖霊女子短期大学の強みや特色

佐藤 学長はたくさんの学問を学ばれていることがよく分かりました。そういった経験も踏まえて今後の教育改革に生かされるということだと思いますが、現在の聖霊短大の強みや特色をお聞かせいただければと思います。

フィリップ 今の学生は、一人ひとり個人差がありますが、みんなグローバルリーダーシップを持っています。本学では、「グローバル」「地域」「自己」の3種類のリーダーシップについて、コーチングと授業を受けます。コーチングは少人数でしかできないので全員は受けられませんが、授業はみんな受けられるようになっていて、ITやDXも基礎科目になっています。ドローンを使って写真を撮ったり、AIの音楽の先生もいますのでAIを使って音楽を作ったり、文章を作ったりもしています。

英語力については、ロボットと英語で話したり、昼間は外国人の先生方と話したりして磨いています。英語と日本語で学べる授業もあります。私が担当している学部は、同じ科目を英語と日本語で教えています。私たちのグループは40人いますが、そのうち36人が英語で授業を受けています。英語を学びたい学生が多く、皆さん英語力を上げています。

技術力については、プログラミングに力を入れています。ロボットの活用力とプログラミングは強みになるので、みんなができるように、そしてすぐにはできない学生も、後で一人でも学ぶことができるようなコースにしています。

人間性については、何があっても大丈夫だと思えるような、基礎的な人間力と生きる力を身に付けてもらいます。

ビジネス力については、学生に「学校からは1円も出さないけど、何かビジネスをして、利益が上がったら寄付をしましょう」というイベン

トを行っています。例えば、メキシコ料理を出すとなると、学生の昼食は大体500円くらいなので、利益分を上乗せして800円で売る。500円の料理を800円で売って利益を上げるのはすごく難しく、800円だと10人ぐらいしか買ってくれません。そこで私は、「スポンサーを見つけてください。あなた方が宣伝でチラシを配ってくれるなら、それは大学の宣伝にもなるから私のポケットマネーから3万円出します」と言います。そういったビジネス手法も教えています。それで1万円ぐらいの寄付が集まって、以前はウクライナ難民に送ったこともありました。

聖霊短大では、学生にビジネス力と技術力を身に付けさせる、そして人間力で人を助ける。そういった面にもすごく力を入れています。

佐藤 現在は生活文化専攻、生活こども専攻、健康栄養専攻の三つの専攻がありますが、それぞれどういった特色があるのでしょうか。

フィリップ 生活文化専攻では、商品開発、ビジネス、地域貢献、イノベーション、全てを学んでいます。ICTを中心に、DXデザインなど情報関係に強みがあります。

生活こども専攻は、幼稚園の保育士が中心で、国際的に対応できる人材を育てています。私が初めて愛知県に来た頃は、ほとんど外国人はいませんでした。10年ぐらいしたらトヨタの関連で結構多くなりました。そうすると、幼稚園



(佐藤所長)

にも外国人の子どもが増えるので、それに先生方が対応しなくてはいけなくて、どこも困っていました。国際教養コースを設けてシンガポールで保育実習を行うなどして、秋田でも国際的に対応できる保育士を育てています。

佐藤 日本の子ども教育というより、グローバルに対応できる人材を育てるということになりますね。

フィリップ そういうことです。やはり秋田も国際化が進んでいますから、外国人にも対応できるようにしておきたいのです。幼稚園にそういう先生が1人でもいれば、外国から来た子どもや、もちろん外国に行く日本の子どもにもアドバイスをしてあげられます。それができる人材を育てたいということです。

健康栄養専攻では、管理栄養士やフードスペシャリストなどの資格が取得できます。その他食品などの商品開発を主に学んでいます。

3 女性リーダーの育成・養成について

佐藤 現在、女性リーダーの育成に関して、大学として具体的にどのような取組みをされていますか。

フィリップ リーダーコースの授業は全部実践的です。本学ではリーダーシップコーチングの授業を少人数で行っています。コーチングの理論と実践を組み合わせる形で、実践は学内でを行い、ボランティア活動を行うこともあります。そして留学・インターンシップで海外に行ったり、アルバイトもしたり、どちらも社会と関わることで、たくさん経験してもらいます。生活文化専攻では、金曜日の午後は授業を入れずに、金曜日の午後から土日はアルバイトができるようにしています。短大は2年間しかありませんから、できるだけ社会経験をしてもらいたいと思っています。

佐藤 これから日本は一層人口が減っていきます。そうしたときに、当然、女性の社会進出が求められ、その中で女性リーダーが増えていかなければ社会が成り立ちません。企業、地域、家庭も含めて、女性リーダーが増えていくためには、どのような取組み・変化が求められていくと思いますか。

フィリップ 一番大事なことは、女性がリーダーになるという自覚を持つことです。今はチャンスがたくさんあるので、自覚さえ持てばどんどん増えます。高市総理が一番の例です。

そうしたことを踏まえて、これからは子どもに留学をさせることが必要になるかもしれません。学校側も同じで、留学などに投資をしていく必要があると思います。

企業側は、若い社員にもっと責任を持たせた仕事をさせてほしいと思います。その大きな理由は、人口が減少していく社会では現場で育ててもらおうということが期待できなくなり、社会に出るとすぐに自分で考えて行動しないといけないからです。昔の日本は現場で育ててもらいましたが、今は自分に任されたことはすぐに現場でできるように育ててから送り出しています。企業とも、インターンシップなどで卒業前からタイアップしながら、学生にいろいろな体験をさせたり、合同で商品を開発したりしています。そうした学びを通じて社会とつながることによって、学生は安心して社会に出ていけます。

あとは、学生に起業させることも大事です。トヨタはよく「私たちのためにこの部品を作ってくれないか」と言って商品開発をさせています。商品開発への投資と考えて、学生に「独立して会社を興してくれないか」と言ってやらせる。それが学生の事業経験にもなります。そういった視点からも考える必要があると思います。

4 大学改革について

佐藤 聖霊短大は、2027年度から男女共学化、2028年度からは一部4年制へ移行されますが、まず共学化に至った理由と、その狙い、特に秋田県内の男子に門戸を開くことの意義と効果についてお聞かせください。

フィリップ 聖霊短大の健康栄養専攻では、管理栄養士の免許を取得できますが、男子学生の場合は免許取得のために県外に行かなければなりません。そうした状況を改善するため、1専攻だけ男女共学化することは以前から考えていましたが、一部は共学化して一部は女子だけになってしまうと、同じ場所に仕切りの壁を作らなくてはいけないなど、4年制大学に関わるルールがあるので、なかなか進展しませんでした。しかし、今、開発しているビルス教育は、男女共学で学ぶものなので、その教育を施すためには共学化する必要があります。2028年度に4年制にする前に共学化しようというのが大きな理由です。

佐藤 男女共学化もさることながら、一部4年制移行では、地域共創マネジメント学部構想とグローバル栄養学部構想があって、地域共創マネジメント学部構想は、今までの聖霊短大の歴史からすると相当エポックメイキングなことではないかと思います。ビジネス、行政、テクノロジーの観点から地域課題と直接向き合った教育をしていくということだと思いますが、その意義と効果はどのようにお考えですか。

フィリップ それは、開発中のビルス教育をマネジメントの中に取り入れたものです。つまり、技術力、イノベーション力、リーダーシップ、ビジネス力を持った人材の育成を4年間でやるものです。そうすると最先端のAIの活用力も育成できるので、今まで人間性ばかり強調してきたところに技術力などを合わせることで、

世界トップの人材育成をしようと思っています。

理由はたくさんありますが、基礎となっているのは豊田佐吉さんや本田宗一郎さんのような世界トップの技術者を育てる教育と、聖霊短大のように地域で女性が社会進出する手助けをする、家庭を助けるという教育など、これからは男女共同で活躍して社会をつくっていくことになるため、こうした必要なスキルを全部組み合わせることでいくことになります。

今、世界ではマネジメント力を持った人材が不足しています。アンケートを採ると、アメリカ、ヨーロッパ、インドでも、スキルアップは個人に委ねられていて、その手法が分からないから管理職になりたくないという人が8割に上っています。また、コロナ禍以降、世界的に競争が激しくなる中で、失敗したら自分が全ての責任を負わなければならない、自分にその力はないと思ってしまうという懸念もあります。

そうした中で、私たちはマネジメントを科学的に勉強する58種類のスキルと、それを生かすための21の手法を開発しました。

イノベーションでは、アイデアを捻出するための思考がとても大事です。また、思考も一つではなく、私たちは「超越思考」「飛躍的思考」「ディスラプション思考」「ロジカルシンキング」の四つの思考を組み合わせることを考えました。今ある大学制度は、S T E M (Science Technology Engineering Mathematics)教育や文学が中心だったり、国際教養大学のようにリベラルアーツが中心だったりしますが、まずはそれらを超えて考えなくてはなりません。そして、今ある本学の女子教育を破壊して男子を入れる、すなわちディスラプションする必要があります。もう一つは飛躍的に考えるということで、秋田から海外までキャンパスを開きます。

それに複雑な問題を構造化し、解決策を導き出すためのロジカルシンキングを組み合わせます。私たちは今、ビルス教育に必要な思考についての百科事典を作成しているところです。

佐藤 グローバル栄養学部構想は、食と栄養に関する世界的な問題にも取り組まれ、当然SDGsの観点からも注目されると思いますが、具体的にはどういった人材の輩出をお考えですか。

フィリップ まずは世界的なシェフになれる人材の輩出と、グローバル食品の開発を考えています。材料は秋田のものだけでなく、現地のものを使った食品を開発して、売れるようにします。国際栄養政策では世界保健機関等で働ける人材を輩出する。そして栄養行動経済では栄養と行動を組み合わせた経済をつくり、商品化する。医療栄養では管理栄養士の育成や公衆衛生を学びます。食品開発と医療はどこの大学でもあります。国際栄養政策と栄養行動経済は聖霊短大にしかないかもしれません。しかも、博士課程まであります。

卒業時に目指す姿は、リーダーシップ、インクルーシブマインド(全ての文化を取り入れる)、マインドフルネス(自己管理力)、国際的な視野、グローバルビジネス力とマネジメント力、イノベーション力と政策立案力、データサイエンス力とAI活用力、そして今も聖霊短大で行っているDX活用力を熟知した人材です。

卒業後は、学校がスタートアップ支援をします。学生に投資するつもりです。例えば、後継者がいない会社を受け継ぐならクラウドファンディング支援を行います。地域を盛り上げるためにプロジェクトをしたいなら、それも学校が支援します。

また、進路支援も幅広く行い、地域共創プロジェクトの支援や、国際公務員になりたい人も支援していきます。グローバルビジネスについ

ては、名古屋では各大学に国際公務員コースがありますが、秋田にはありません。しかし、本学にもなりたい人はいますので、そういう人を支援しようと考えています。

秋田に密着した進路支援については、2028年度に地域共創国際的人材育成課程に日本人の学生に入学してもらい、2030年度には留学生を30人ぐらい入れる予定です。そして、2031年度に日本人の学生はできるだけ秋田の会社に就職してもらい、2033年度には留学生に先輩がいるところに就職してもらおう。「先輩がいるから、あの会社に行ってみようか」という先輩後輩の関係をつくって、地域共創で人材を育成していくという仕組みを考えています。

5 地域課題への取り組み

(1) 秋田県内の働き手不足

佐藤 今、秋田県が抱える大きな問題として人口減少があり、働き手不足が深刻になりつつあります。その原因の一つが、若者の都会への流出です。若者が県外に出て行く理由をどのようにお考えでしょうか。

フィリップ 以前実施したアンケート調査で、若者は県内に学びたい大学が少ないから出て行くということが分かりました。学生たちに、「秋田県につくってほしいものを教えてください」と質問すると、みんな大学をつくってほしいと答えています。自分の友達が県外に行くのは、学びたい大学がないからだということでした。本当に驚くことに、学生1,000人へのアンケートでこの質問だけ回答率が高くなりました。若者が県外に出て行く一番の理由は、学びたい大学がないことだと考えています。

佐藤 つまり、学びたいもの、自分が求めるものが、秋田にはないということですか。

フィリップ そうです。私たちも、他の大学と

被らないように学部をつくっています。栄養の分野もそうですし、マネジメントの分野もそうです。できるだけ新しいものをつくっていきたいと考えています。

佐藤 つまり、聖霊短大のこれからの改革では、若い人たちが求めていることを取り入れていくことになりますか。

フィリップ 学びたい分野を取り入れていくということです。ビルス教育で、秋田にない政治、ビジネス、栄養といった分野をどんどん増やして最高の教育を行います。医学部もビルス教育でつくれると思います。イノベーション力を持って、自分で病院が経営できて、ロボットを使って手術ができて、人間性も高い医者を育成する。どんな学問でも教えられる分野なので、学生が学びたいものは何でも取り入れられると思います。

佐藤 今回の聖霊短大の改革では、若い人たちが求めていることをできるだけ取り入れて、ビジネス力、マネジメント力、そしてイノベーション力の三つが改革のキーワードだということがよく分かりました。

それでは、若者の県内就職を増やすためには、地域社会や企業に何が求められると感じていますか。

フィリップ 今の学生たちを見ると、地域に貢献したい、企業を通じて地域に貢献したい、企業と一緒にビジネスをやっていききたいという3パターンの人がいます。企業は、自社の組織に入って働いてもらうときに、商品を開発して販売までしますが、開発したものを販売するだけでは、部分的に任せることにしかありません。しかし、経営者になることを前提として雇用すれば、リーダータイプの人たちが伸びて、会社にさらに貢献してくれます。もし組織の中でリーダータイプの人がいたら、その人たちに責任

を持たせて、上司が後ろからサポートしてあげると育ちます。

ですから、企業も自分たちで全部やるよりも、「ここを一緒にやりませんか」というやり方で学生に投資する。そして、彼らが分からないことをサポートしてあげると、若者は秋田に残ってくれると思います。東京など都会に行く人に聞いてみると、「この会社に行って、後々は他にやりたいことがある」ということが多いです。都会に魅力を感じているのではなく、学びを目的に出ていくのです。そうではない人もいます。もしもかもしれませんが、そういう学生が結構います。そこを受け入れて、この3パターンの人をうまく取り込めば、県内就職が増えると思います。

(2) グローバル化

佐藤 日本は人口減少により、国内のマーケットが縮小していきます。このため、海外にマーケットを求めていくことも場合によっては必要になります。しかし、県内の企業は海外への進出・取引拡大については、大きな広がりは見られません。また、働き手不足にもかかわらず、外国人の就労者数は全国で最低です。県内経済の発展にはグローバル化を進めていくことが、必要だと考えます。秋田県のグローバル化について、現在の状況とその必要性についてどのようにお考えでしょうか。

フィリップ 秋田もグローバル社会の大事な一部で、秋田の成長はグローバル社会の成長でもありますし、秋田県の後退はグローバル社会の後退でもあります。

私たち聖霊短大では、個人の力は地域の力、地域の力は世界の力ということを教えています。企業にとってマーケットを広げることは大事です。秋田にしながらインターネットでマーケ

ティングすることもできるので、あえて外国に行かなくてもいいわけです。授業でよく学生に、商品開発のときには英語で商品名を書いておくことを教えています。そうすれば、例えばAmazonなどに出品すれば海外にも商品が売れます。消費者の嗜好を理解して、日本でネット販売してみてから、現地生産に移す。作ることも同じで、秋田県内で働き手が不足しているなら、同じ商品を現地で安い人件費で開発すれば、そこでも売ることができます。

そして、一番大事なことは技術力とビジネス力を持った人材を育てることです。本学は、社会人向けのマネジメント教育も始めようと思っています。そうすることで、チャンス求めて秋田に外国人が来るかもしれません。

もう一つは、秋田県は外国人の人材派遣に関する取組みをもっと強化するべきだと思います。名古屋では、ブラジルなどいろいろな国から外国人が来ていますが、すべて人材派遣会社が連れてきます。日本語教育まで人材派遣会社が行っています。ただ、それを県内の会社が全部行うことは難しいと思います。中小企業の社長が、社員の日本語教育、英語教育までやっていたら、組織運営ができないと思います。そこを支える外国人の人材派遣会社を、合同投資でもいいのでつくったらいいいのではないかと思います。

東京などの大都市では、外国人と日本人のトラブルがあるという話を聞きますが、愛知県ではトヨタという大きな組織があって社員同士のつながりがあるので、あまりトラブルを聞いたことがありません。地域に馴染むには、人材派遣会社がとても大事だと思います。本学でも、教育目的で人材派遣会社をつくってもいいと思っています。人材派遣会社と学校が一緒になって日本語教育をしながら秋田の文化を教育すると、外国人は増えると思います。

(3) IT・デジタル社会への対応

佐藤 聖霊短大はデジタル化、DX関連の教育にも力を入れられていますが、具体的にIT化・デジタル化について、今後どのように成長させていく計画をお持ちですか。

フィリップ DX力、計算能力、AI活用力、プログラミング能力、ホームページ作成能力の全部を社長・社員が身に付けて、さらにビジネス力、リーダーシップを一人ひとりがみんな持てるようにします。そのためのプログラムとして、ビルス教育に入ってからマインドづくり、学生の学習活動をリストアップしており、そのための意図的学習活動も準備しています。

今、私たちが考えているのは、世界のビジネス文化・宗教文化を35種類に分けて、2033年に35か国にビジネスサテライトセンターを設置することです。そこで実習を実施したり、ビジネス能力の向上を図ったりします。そこには現地のスタッフがいますので、学生がインターンなどで行って創業体験をしたり、商品を持って行って短期間で売る体験をしたりします。海外キャンパスもつくる予定です。35か国には本学の姉妹校もあるので、まず姉妹校から始めますが、海外キャンパスがある5大陸で予定しています。4年間で8学期あるので7か国に留学できます。大学院に行くと6年間ですが、単位互換で単位を取得すると同時に、海外の4大学に通って卒業することができます。そうすることによって、語学力とネットワークを広げていきます。学生がこれらの能力について自分で体験しながら行う意図的学習活動を、環境提供と文化に分けて行う予定です。

商品開発でも、例えば地域に密着したイノベーションでは、冷房設備はどこの国でも使うと思いますが、乾燥している地域なら湿気を取る機能は要りません。除湿機能を省けば、もっと

安く売れます。そうすると、競争が激しい中で他社との差別化ができ、たくさん売れると思います。そういう地域密着型開発を通して自分の競争力を高める訓練も行い、学生を育てていこうと思います。

6 学長の夢、秋田県の若者に期待すること

佐藤 学長は教育改革という大きな夢をお持ちですが、秋田県のこれからの若者に期待したいこととしてはどのようなことがありますか。

フィリップ 私はいつも学生に「やればできる」と言っています。私たちは毎日成長し、学生も一緒に成長しますから、彼らには、こうすれば誰でもできる、秋田とか東京とか関係なく、秋田から世界に広げられるということを言っています。どこかに行かなくてもできる時代に生きているので、あえて場所を選ぶ必要はありません。自分がここでやると決めれば、ここが世界の中心になります。やればできるということです。

また、ビルス教育を開発した目的に、豊田佐吉さんや本田宗一郎さんの精神、日本の経営スピリットがあります。技術を自分で開発して、売って、リーダーシップを持っていて、人間性にも優れている。トヨタは特に若い人を大事にします。それを私たちは教育風にアレンジしました。みんな何かを開発して、世界に出ましようということです。

これからはAIが商品を開発してくれたり、ロボットが助けてくれたりするかもしれませんが、人間のマインドづくり、心づくり、イノベーション、アイデアづくりは、人間にしかできません。考えることはAIにもできないと思いますし、ロボットにもできません。人間として考えるから、私たちは人間でいられるのです。考えて楽しい世界をつくる時代なので、秋田からつくっていきましょうということを言いたい

です。

佐藤 最後に、秋田県の経営者に教育の面から期待したいことはありますか。

フィリップ 企業は、若い人にもっとチャンスを与えてほしいです。大学にも来てもらって、「今度、うちはこういうことをやるから一緒にやりませんか」と学生に呼び掛けてほしいと思います。合同プロジェクトの誘いに来てくださることを期待したいです。

佐藤 そうすることによって若者も、秋田県にこのような企業があるのだということを知る機会になると思います。そのためには、やはり企業も努力をしてほしいということですね。

フィリップ 大学にぜひ、来てください。私たちにチャンスをください。大学側も誘うつもりでいます。ラボは体験の場所なので、各企業が大学にラボを開いてもいいのです。そこで学生を誘ってもいいですし、そのようにして就職のマッチングを現場で行っています。学生が来るのを待たずに、攻めてきてください。

佐藤 分かりました。本当に今日はどうもありがとうございました。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

本稿は、2025年11月14日に秋田市内のパーティーギャラリーで行われたインタビューをまとめたものです。

(文責：秋田経済研究所)